
敷島の青い車その5【リライト版】

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

敷島の青い車その5【リライト版】

【Nコード】

N5018E

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

作者が半ば自棄気味に続けている「敷島シリーズ」なのですが、どうにも「その5」の出来に不満足で、リライトしてみました、という、ただそれだけのお話です。無印「その5」と比べて読んでいただければこの上なく幸いです。

もういい加減、こういう使いまわしの文章を書くのはどうかと思うんだけどなあ、と半ば自己批判気味に言い訳しつつ書くけれど、某自動車メーカーの開発部の若き俊英・敷島は、最早お約束とばかりに大和部長のいる開発部長室に駆け込んだ。

「大和部長！ やりました！」

「ん？！ は！？」

突然入ってきた敷島に、大和部長は面食らったようだった。敷島がドアを開け放った瞬間、何か長い棒のようなものを振り回していた大和部長だったけれど、その棒を、まるで0点の答案を隠す子供のように、あわてて背中に隠すのだった。

「ぶ、部長？ 何をなさっておいでだったんです？」

「い、いや、なんでもない」

明らかにバツが悪そうな大和部長。敷島と目をあわさないように、視線を逸らしている。

怪しい。そう思われたのは、何も読者の皆様だけではあるまい。

当然、敷島もいぶかしんだ。

「一体、何をお隠しで？」

「ここに、コラ！ 余計な詮索を！」

そんな大和部長の言い分を無視して、敷島は大和部長の背中を覗き込んだ。当然、背中には大和部長が隠していたものが。

「部長、どうして」敷島は、背中を眺めながら無邪気に訊いた。「ゴルフクラブを？」

そう、部長が持っていたのは、ゴルフクラブだったのだ。

大和部長は、おたおたと言い訳しだした。

「い、いや、今週の日曜日、接待ゴルフがあつてな、その練習を…」

「ほほう」

普段温厚な敷島も、さすがにやりきれない顔を見せた。やりきれない、というよりは、「おいアンタ、俺がこうして働いている時間に、何遊んでやがるんだよ」とでも言いたげな、しかめ面だった。普段、見せない敷島の顔に恐怖を感じたのか、大和部長は慌てて言い訳を続ける。

「い、いや、本当だよ、本当だって！」

「へえ」

敷島は、表情を変えずに、部長の周りをつかつかと歩いた。

「でもねえ、部長、今更ですけど、大和部長は開発部の部長ですよ
ね？」

「そそそそ、そうだが」

ちよつと声が上ずる大和に、敷島は訊く。

「じゃあ何で、接待ゴルフを？」

開発部、というのは、新しい技術の開発を行なう部署である。内向きの業務をしている総務部と比べればまだ外部の人間と付き合う機会があるものの、けれど営業などと比べればはるかに外部の人間との接触は少ない。何が言いたいのか、というと、「接待」というものは、外部との接触の多い営業部の専売特許だ、ということだ。それに、他の会社はどうか知らないが、敷島が勤めている会社の開発部には、“誰かの接待をする”という慣習が無かった。

とにかく、大和部長がゴルフクラブを握っている、それが敷島には不思議で見慣れない光景だったのだ。

すると、大和部長はため息を吐いて応じた。

「ああ、それは、開発部がもう一つ出来たせいだ」

そう、最近、“第二開発部”なる部署が出来たのである。

どうやら会社の上層部は、今の開発部に不満を持っているらしい、そこで、もう一つ開発部を作りたがっているらしかった。そして、今年の春、開発部を二つに分割する形で、第二開発部が成ったのである。そこら辺のいきさつは、「敷島の青い車その4」を参照の事（と、宣伝を打っておく）。

大和部長はため息をまた吐いた。

「元々、無理があったんだ。開発部を二つなんて。しかも、予算を増やすでもなく、な。結局ワシたち第一開発部と第二開発部が、少ない予算を奪い合う構図になっているわけだ」

「はあ……」

敷島は、頭を掻きながら首を傾げている。敷島は、研究バカのある男なので、そういう会社のパワーバランスとか、予算の分配とかいった問題に、興味が向かないようだし、そもそも理解も出来ないらしい。

「で、しかも、ワシ達第一開発部の方が、明らかにジリ貧だな」

大和部長が言うには、第二開発部のほうには、社内において影響力の高い人間が多いらしい。だから、予算も取り易いのだ、と口を辛く批判した。それを、敷島はつまらなそうに訊いていたけれど、次の大和部長の言葉に、ようやく反応を見せた。

「しかも、第二開発部の連中、リッターあたり30kmも走るエンジンを開発したらしい」

「ななな、なんですって!？」

「しかも、だ」大和部長は興味無さそうに続けた。「そのエンジン、ハイブリッドエンジンじゃないそうだ。つまり、純粋なエンジン効率だけでこれだけの成果を出している、ということだ。と、なると向こうに予算が相当流れてしまうだろう。そこで、ワシのこのゴルフクラブの出番だ」

大和部長は、まるで勇者が伝説の剣をかざすような要領で、ゴルフクラブをかざした。

「情けない話だが、我々第一開発部は、そのエンジンに対抗するだけの新開発はない。かといって、ただ手をこまねいているだけというのも癪じゃないか。そこで、会社の重役連中に、やりたくもない接待をかけているのだ。予算をふんだくるためにな」

「あとう」

さっきまでちんぷんかんぷんな顔をしていた敷島は、また思い出

したように顔をしかめた。

「誤魔化さないで下さい。なあにが、“やりたくもない”ですか。勤務時間帯に素振りなんかして！」

「い、いや、本当に気が進まないんだ！ 同じ“振る”なら、竿を振ったほうがはるかに楽しいよ」

「竿？」 敷島は首を傾げた。「部長、釣りが趣味でしたっけ？」

「ああ、君との付き合いより、はるかに長い趣味だ」

「ああ、そうですか。ともかく……」

コホン、とわざとらしい咳払いをしたあと、敷島は続けた。

「部長が、ゴルフクラブを振ってらっしゃる間に、新しい動力を開発したんですが」

「え？ 今回は早いな」

「ええ」。敷島は、狐のような鋭い目を大和に向けた。「それでも僕、地道に真面目に仕事してますからね、誰かさんとは違って。……で、僕の開発した動力を、見に来てくださるんですか？」

「ああもう分かったよ。君がそんなに愚痴っぽいとは知らなかった」。まるで音を上げるように、大和は続けた。「見に行くよ。部下の仕事ぶりを見るのも、上司の務めだからな」

「“も”、じゃなくて、“は”の間違いじゃないですか？」
と、敷島は付け加えた。

試験滑走場。

いつものように、その真ん中に、青い車が一台置かれていた。

その前に立った大和は、いつものように質問した。

「で、今回は、どういう感情をエネルギーにしたエンジンを積んでいるんだね？」

毎回、敷島は妙ちくりんな動力を開発するのだけれど、毎回決まって「人の感情からエネルギーを取り出す」というエネルギーの取り出し方である、という点は一致している。他の研究者から言わせれば、「それってペテンか何かじゃないの？」と聞きたくなって

しまうようなエネルギー理論である。究極のクリーンエネルギーである反面、そのエネルギーを取り出す感情の特徴が、エンジンの回りに方に反映されてしまうのが欠点と言えば欠点なのだ。そのせいで、バックしからない車やら止まらない車やらに乘せられ、これまで大和部長は散々な目に遭っているのだ。

けれど、大和部長は、これまでの“経験”があるから、もはやまるで疑っていないのだ。

「はい、今回は、“向上心”で動きます」

「向上心、とな？」

「はい」敷島は、青い車のボンネットを叩きながら続けた。「もっと良くなりたい、もっと良くしたい。もっと改善したい。もっと切磋したい。そういう気持ちですよ。そういう気持ちの周りに生じるエネルギーを取り出して、エンジンを回しています」

「ふん、なるほど」

二人は、青い車に乗り込んだ。今回も、大和部長が運転席に乗り込んだ。

「向上心、か。むしろその言葉は、君にこそお似合いだと思うんだがな」

と、ハンドルを握りながらぶつぶつと文句を垂れる大和部長に、敷島は反論した。

「実は、もう僕は試乗してみているんです。で、その結果が上々でしたので……」

「道理で自信があるわけだ」

「はい、あとは、向上心の無い人でも動くのか、そこが関心事なんです」

「ほう、つまりは」大和部長は言った。「ワシのことを、“向上心のない人”と思っている、ということだな？」

「あ、いや、そんなつもりは……」

明らかに、あちやう、という顔を見せる敷島に、大和部長は言った。

「ふふん、それでも、向上心は人並みにはあるつもりだぞ？」

「ああ！」敷島は合いの手を打った。「勤務時間帯に接待ゴルフの練習をなさるくらいですからね。ゴルフに対する向上心だけは、お強いのでしょうか？」

あちゃあ、さっきの愚痴がまだ続いている、どうしよう、と大和は心の中で苦笑いを浮かべた。

「で、何をイメージすればいい？」

「今、改善したいこと、とか、目標とかですかね。ま、部長の場合、“ゴルフの腕前を上げたい”とでも念じるのが適当なんじゃないですか？」

ぐぐ。まだ言うか。大和はそう思ったが、けれど勤務時間帯にゴルフクラブを握っていた負い目があるので、反論できない。仕方がないので、ゴルフの腕前を良くしたい、そう念じる大和なのだった。ブウン。

そんなフィン音と共に、青い車はゆっくりと動き出した。

「あゝあ」

大和は、思わずそう呟いた。この場面で動いてしまっただけは、本当に敷島にあわす顔がない。けれど、非情にも大和たちを乗せた青い車は、ゆっくりと加速を続け、そのスピードを上げていく。

「ふーん、やっぱりそうなんですか」

やっぱり、敷島が突っかかってきた。

「やっぱり部長ってば、接待ゴルフだ予算の獲得だあと偉そうなことを言っておいて、しかも、僕がこうして実用可能なエネルギーを開発しているときに、好きなことで遊んでいー」

たんですね、と敷島が言おうとした瞬間、青い車に波乱が訪れた。突然、前に投げ出されそうになって、二人の体がシートベルトに食い込む羽目になった。こういう風に、体に慣性がかかるときというのは、急ブレーキでも踏んだときだ。

「な、なんで急ブレーキなんか踏むんですか！ 舌噛みそうになっちゃいましたよ！」

「……い、いや」大和部長も、首を傾げた。「ワシも、何もしていないぞ」

「え？ そんなバカな。……ま、とにかく部長、もう一度、走り出しましょう」

「あ、ああ……」

今度も、結果は一緒だった。

あるところまではまるでやる気が無さそうにゆっくりと加速するの、あるところで、もう良いや、と匙を投げるようにしてブレーキがかかる。そして、また動き出しては止まり、動き出しては止まり、と、一連の動きを見せるのだ。

「あれれ」敷島は頭を掻いた。「故障かな」

ドアを開け、青い車のボンネットをあけた敷島は、カチャカチャとエンジンをいじり始めた。

一方、車の中に残された大和は、手もち無沙汰だったので、口笛を吹いてみたり、ドラムを叩く動作を試みたりして、時間を潰してみた。けれどそれでも飽き足らない大和は、バットを握るように両手を構え、すこし右手を体に寄せた。丁度、竿を振り出す動作をやろうとしているのだ。そして、川の水面をイメージしつつ、大和が竿を振り出す動作をした、その瞬間だった。

ギョルオオオオオ！！

まるで、F1のタイヤ音のような音が辺りに響いたかと思うと、大和を乗せた青い車は猛烈な勢いで前に走り出した。なお、車の進行方向に立っていた敷島は丁度ボンネットを閉めたところだったのだが、ボンネットに乗り上げるしか逃げ場がなかったようで、ボンネットに大の字になって乗っかっていた。

「あわわわわ！！」

敷島にも大和にも、何が起こったのか分からない。そんな混乱のうちにも、どんどん青い車は速度を上げていく。もうきつと、高速道路でさえ切符を切られてしまうような速度になった頃、敷島はフロントガラス越しに、大和に訊いた。

「ぶぶぶぶ、部長！　今、何を思い浮かべているんですかああああああああああああ！！！」

もはや敷島、最後の方は悲鳴であった。一方の大和も、悲鳴で応じる。

「いいいいいい、今、“釣りの、竿の振り出しがもつと上手くならないかなあ”って思ったんだよおおおおおおお！」

「ってててて、ことは、故障してなかったんですねええええ！？」

「そそそ、そうみたいだなあああああ！」

「すいません、部長おおおおお！　部長、本当にゴルフがあんまり好きじゃないみたいですねええええええええええ！　誤解してましたあああああああああ！」

「んなことどうでもいいわあああああ！！　つうか、どうやって止まるんだあああああああ！！　これええええええええええ！」

……そんな、イヤにテンションの高い試運転は、終業時刻ぎりぎりまで繰り広げられたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5018e/>

敷島の青い車その5【リライト版】

2010年10月8日15時11分発行